

はるかな極東の地に開いた高度の文化と、人間精神の昇華に対してである。それはアテナやアレクサンドリアにも匹敵する恵まれた時代であったと、グルッセ氏はいう。玄奘という求法僧の旅行記によりながら、グルッセ氏は西域やインド、またそこからひろがるボロブドール、法隆寺の仏教美術に思いをはせているのである。

本書の中には、しばしば A. Foucher の仏教美術に関する説が引用されているが、Foucher はガンダーラの仏教美術を、ヘレニズムによるギリシヤ様式をかりたものであることを明示したのであった。グルッセ氏のこの書も、そうしたフランス東洋学の華やかであった頃の学説を映し出しているが、とくに第六章「ギリシヤ的仏教の国にある」には、グルッセ氏の眼が光っている。博識のグルッセ氏のこの書は、読みあげるのに根気が要るが、この書を翻訳された浜田氏に心からの御礼を申し上げたい。

(A5版・三九三頁・金花舎・昭和五十八年刊・八〇〇〇円)

(白土わか)

廣瀬 杲著

# 『廣瀬杲講義集』

第一・二・三・四・五巻

本書は、著者が主宰する私塾「開光学会」の研修会(第一・二巻は二月の研修会。第三・四・五巻は七月の夏期合宿)における特別講義の筆録である。この五巻には、昭和46年より51年迄の間の特別講義が収録されている。各巻のタイトルは、

第一巻 「僧宝の成就——宿業——」(昭和59年9月1日発行)

第二巻 「唯仏一道の開頭——教相判釈——」(昭和59年3月20日発行)

第三巻 「根源的能動——本願——」(昭和58年4月30日発行)

第四巻 「偏依と独存——諸仏称名——」(昭和57年6月10日発行)

第五巻 「宗教心——二河譬——」(昭和57年10月1日発行)

57年10月1日発行)

となつてゐる。これは各研修会のテーマとして掲げられたものであるが、そこには旧来の論題は副題とされ、主題は著者自身による表現がなされている。それは、「その

内部だけでわかり合っているつもりで語られている言葉というものを、一度、現代の社会の中で、あるいは人間の問題の中で言い直してみたいですか、一遍言い直すことを通して、再確認をしてみたいわけがあります。」(第三巻・一頁)という著者の基本姿勢を表わすものである。つまりそれは、専門語を自明の事として巧妙に説明してゆくことで事足りりとしてしまわないで、その様な操作の内でも何時も未解決のままに取り残されている苦悩の人間(自己)に正直に眼を開いて、そこにおいて仏教を再確認するということである。したがって、仏教の言葉を再確認するということは、「私はいったいどうなればいいんだ、私はいったい何を明らかにしてもらえばいいんだ」(第三巻・三〇頁)ということを再確認するということに他ならないのである。

本書において著者は、対象化された仏教の学びということに対して強い危惧を表明している。何故ならば、仏道の問題とは徹底して「求道に立つ者の常なる今日の課題」(第一巻・九頁)としてのみ明らかとなる事柄であり、対象化された途端その生命を失する事柄であるからである。それ故に、対象化され、他人事と成つてゆく仏教の学

びという事柄を如何にして自己の問題として回復してゆくかということがこの講義集の全体を貫く根本課題としてあるのであり、そのことのうえに各々のテーマの究明がなされているのである。だから読者は、其々の巻を読むごとに、「あなたの仏教の学びはあなたが如何に生きるかということ明らかにしてゆく学びと成っていますか？」と尋ねられ続けるのである。

尚、この講義集には下記の二巻の刊行が予定されている。第六巻「新しき仏教者の像——無戒名字の比丘——」、第七巻「真宗教の道理——廻向論——」。

(四六版・平均二〇〇頁・文栄堂・各巻一八〇〇円)

(藤嶽明信)

小川 一乗著

## 『佛性思想』

本書は、長年に亘ってインド大乘仏教における仏性の問題を研究課題としてきた著者が、仏性思想を学ぶことを切望する人々に向けて自らの仏性思想に対する理解を吐露された好著である。「まえがき」によれ

ば、昭和五十六年度の大谷大学における講義「仏性思想の研究」のノートに補訂を加えたものが此度、公刊の運びとなったことになる。すでに著者には『宝性論』やその釈疏を著したチベット人学僧ダルマリンチエンに関する解説研究として『インド大乘仏教における如来蔵・仏性の研究』(文栄堂・昭44)がある。この学問的労作を基本としてその中の難解な部分を書き直しつつ仏性思想についての学問的説明が平易になされているのである。以下に本書の内容を概観することとする。

序章は、仏性思想を説明するにあたっての前提が示される。従来の多岐に亘る仏性思想研究のあり方をふまえて、本書の主眼が、インド→チベットの潮流としてのインド仏教における仏性思想、すなわち『宝性論』の仏性思想を説明することであることを明記している。

第一章は、仏性思想に対する問題提起である。「心性本淨」「自性清淨心」「悉有仏性」という場合に、およそ仏教であるかぎりその実体性は否定されねばならず、つねに仏性とは何か、悉く仏性を有するとはどういう意味かという基本的な問いが必要であることを指摘する。

第二章と第三章では、『宝性論』等に表われる「仏性」という語に相当するサンスクリット原語の吟味、そして基本的命題としての「悉有仏性」の意味が検討されている。『宝性論』には、その意味が「法身遍満」(如来の慈悲的な宗教的事実、「真如平等」)(如来の智慧的な根源的事実)、「有仏種性」(仏道実践における自覚的事実)という三理由によって明されるが、これは「悉有仏性」が大乘の仏道体系にかなった意味を有することが明らかにされている。

第四章は、仏性思想が大乘仏教においてどのような思想的立場にあり、また『宝性論』に何故に仏性思想が説かれなければならなかったのが究明される。

第五章より第七章までは、「悉有仏性」と密接な関係にある「空性」「常楽我淨の四波羅蜜多」「一闍提」について綿密に所論が展開されている。とくに第五章は、前章における仏性思想の思想的立場づけによって示された般若空觀との関わりをうけて、『宝性論』の空性は悉有仏性と矛盾するものではなく、仏性が本性空性ということにおける最も本来的なあり方としての諸空においてのみその存在性が説示されるべきであることが明確にされている。